

シーズ型基礎研究 と ニーズ型応用研究

—— 高等教育研究の遠近法 ——

松尾 欣治(学生問題総合研究所)

[I] シーズ型基礎研究

大学2年生だった時の5月、ふとしたインスピレーションから高等教育研究に迷い込んだ。四半世紀近く昔の話である。私が学んだのは草創期の武蔵大学人文学部で、私はその第3期生にあたる。

大学、学部、学科の新增設に当たっては、日本の大学教育の現状を広く見渡し、より良い教育の実現のために理想を高く掲げるものである。そして、その理想はカリキュラムに形となって現れる。

問題はここで、武蔵大学人文学部の場合は、「教養課程と専門課程の別を全廃」したところにその特色があった。大学設置基準が大綱化されて以降、教養課程と専門課程の別を廃するものは流行化して、このことをもって特定学部、学科の特色とすることはできなくなった。

四半世紀前は、事情が違っていった。「高校の繰り返しにすぎない教養課程」という“印象論”が、教養課程“批判”と誤認されて、まかり通っていた。教養課程が高校の繰り返しにすぎないように感じられる“原因”を突き止め、その原因をもとに教養課程全体を問題にして初めて、印象論から脱することができた。

幸か不幸か、大学2年生のある日、出席日数を確保することだけが全てのような、暇で「なぜこんなところで時間を無駄にしなければならぬのか」と考えると、無性に腹が立つ英語教育を受けながら、窓の外風景を眺めていたとき、突然、教養課程が高校の繰り返しだと言われる原因に気がついた。拙著、

『大学って、どんなところ?』(龍溪書舎)はこうして執筆されることになった。

この執筆は13年と長期にわたった。それほど、この研究は難しかったのである。しかし、こういう研究は難しければ難しいほど副産物が増えて生産性が高くなる。大学間で競争原理が健全に働かないために、一度頂点に立った大学が大学間格差のピラミッドの頂点にいつまでも居続けられる“からくり”も見抜くことができた。

以上は、もうひと昔も前の話である。ここまで見抜ければ、それを著書として公にすれば、私の任務は終わったと思った。高等教育研究のために大学に入ったわけではなかったし、自分が大学生だったとき、存在しなくて困った本を書いたのだから、後は、個々の大学生の問題だろう、と考えたのである。

私は間違っていた。私の任務は終わったのではなく、拙著『大学って、どんなところ?』が新たな任務を課し、研究の終点どころか、出発点に戻ってしまった。それ以後の研究で中心的な位置にあつたのは“授業中の私語”問題で、この研究にも意外な結末が待っていた。

“授業中の私語”は、分析、批判されるべき対象ではなかったのである。むしろ、授業中の私語は、その効用から大学教育を逆照射して、大学教育の在り方そのものを考え直す絶好の視点を提供する現象だったのである。(注1)

さらに、もしそうとするならば、一刻も早い事態打開の重要性の観点から、研究の方向も変わっていく。具体的には、大学の教室で

私語が発生する原因・環境を大学生にモデル提示し、双方向授業成立のためのモデルを開発することによって、授業に積極参加させる“教育”ではなく、発言する“トレーニング”が開始されなければならない。

このモデルも既に開発しているが、ここで注目していただきたいのは、「学問研究」から「研究開発」に用語が換わった点である。この研究姿勢の変化は、私の場合、自然の変化で、なんら苦痛を伴うものではなかった。高等教育研究に迷い込んで以来、私の研究成果は“学問の衣装”をまとおうにも、まといようがなかったから、「研究」と「開発」とを区別する必要もなかったのである。

〔Ⅱ〕 ニーズ型応用研究

このような研究経歴は、珍しいのではないかと思う。しかし研究を続けている以上、他人事として「珍しい」で済ませわけにはいかない。さらに、すぐにでも改善できるものを研究と称して“静止”させ、観察した上で論文を書き、研究者としてポイントを稼ぐだけで事態を放置、というのにも納得がいけない。

「なぜ、研究は活かされないのか？」

この問いは、すべての高等教育研究者に共通した悩みである。高等教育研究者に研究成果が活かせる授業科目がほとんど設定されていない現状では、「研究」と「実践」とが乖離するもの化方のない面もある。それでも高等教育研究は日々前進して、倦むということを知らない。

そんな折、経営学の教科書から「ニーズ型基礎研究とニーズ型応用研究」という分類法を学んだ。この分類に従うと、私の研究はシーズ(Seeds)型の基礎研究に属し、日本が苦手とする研究、ということになる。それに対して、ニーズ(Needs)型応用研究は、「需要サイドの顧客ニーズやウォンツ(欲求)を

重視するもので、『このような顧客ニーズからの要請として、新製(商)品ができないか』という顧客からの要請に基づいて開発する」ものということになる(注2)。

ここでシーズ型の基礎研究が存在しないと仮定して、ニーズ型の応用研究を基礎研究の位置に据えようと、基礎研究かあつての応用研究であるから、基礎研究が“ライン化”し、研究者が“技術者化”する事態を招く。基礎研究でありながら実際は応用研究であるから、教育実践をラインとみなし、自らを研究開発の位置に据えることにもなる。

基礎研究としての応用研究は、ライン(教育実践)の研究を“品質管理”の研究とできるとし、就職問題を“物流”の問題として研究することもできる。さらに大きく、日本経済の観点からも高等教育を研究することもできる。歴史学の手法を応用することによっても、最新の哲学の流行に乗って高等教育論を展開することもできる。

情報の氾濫に疲れ、いま始まっているのは“地域の時代”であり、“無理のない等身大の生活”である。ニーズ型応用研究には手が出せなかった「“教養”とは何か？」という問いも、日増しに切迫感が強くなって聞こえてくる。技術者を養成する実学的なニーズ型応用研究から、広い視野と創造性に富んだ教養人が中心となるシーズ型基礎研究への方向転換が、いま社会から緊急な課題として要請されている。

(注1) 松尾欣治「私塾からの風景——大学の原点確保の試み——」『大学論集』第24集 広島大学大学教育研究センター 1995年3月。

(注2) 伊藤陽三編著『実践経営組織論』経林書房 1993年4月。